

# 「エドからロンドンまで」

——ジョン・マクドナルドの遣欧使節団同行記——

松村昌家

## 要旨

一八六〇年創刊の『コーンヒル・マガジン』一八六三年五月号に、「エドからロンドンまで、日本使節団とともに」という標題の記事が載っている。寄稿者は、初代駐日イギリス公使、ラザフォード・オールコックのもとで通訳生兼補佐官をつとめたジョン・マクドナルドだ。マクドナルドは、一八六二年にヨーロッパ諸国へ派遣された幕末使節団の案内係として、江戸からロンドンまで同行し、さらに四十二日間にわたる使節団の滞英期間中も常に行動をとりにした。

それだけに、彼の書いた使節団同行記は、使節団のイギリスまでの全行程を知る上で重要であるばかりでなく、彼らの異文化体験のルポルタージュとしても興味深いものがある。たとえば香港、シンガポール等、アジア地域における西洋文化との出会いを通じて彼らが受けた衝撃、アデンからカイロまでのパシャ専用列車での旅の体験、カイロにおけるピラミッド見学の失敗の記、マルタ島でのイギリス軍備に対する驚異と好奇の眼は、まさに日本人の異文化体験の原風景を描いたものとして、注目すべき点を多く含んでいる。ジョン・マクドナルドの「同行記」は、文字どおり密着観察から生まれた、幕末使節団に関する最初のドキュメントとして、知られざる部分をいろいろと語ってくれているのである。

キーワード…時間観念の落老、アジアの中の西洋、マルタ島の驚異。

## 1 はじめに

ヴィクトリア朝の代表的小説家の一人、ウイリアム・メイクピース・サッカリー（一八一―一六三）を主筆として一八六〇年に創刊された『コーンヒル・マガジン』一八六三年五月号に、「エドからロンドンまで、日本使節団とともに」(From Yeddo to London with the Japanese Ambassadors) という記事が載っている。(以下この文献からの引用は、Mとページ数によって示す。)

同誌の原則として署名はないが、「コーンヒル・マガジン総目次ならびに寄稿者一覧」(本の支社、一九九〇)によれば、この記事の寄稿者は、ジョン・マクドナルドとなっている。初代駐日イギリス公使、サー・ラザフォード・オールコック（一八〇九―九七）のもとで、通訳生、一等補佐官をつとめた人である。オールコックの『大君の都——日本駐在三年の物語』二巻（一八六三）にもあるように、一八六二年、竹内下野守保徳を正使とする幕府の使節団が、ヨーロッパへ派遣されるようになったときに、マクドナルドは一行の案内役として随行を任命された。(第二巻、三三二)

マクドナルドは、一八六二年一月二十一日、使節団が品川を出航するときから四月三日にマルセーユに到着するまで彼らと行動をとともにし、そこで一足先にイギリスへ渡るが、四月三十日にドーヴァーで再び合流、そして、あとは全行程を通じて幕末使節団主脳陣の案内役をつとめることになる。

それだけにマクドナルドは、常に三使らに密着して彼らの言動を観察できる立場にあった。場合によっては、従者たちの眼に入らなかつたことが、彼には見えることもあつたであろう。幕末使節団の知られざる部分が、彼の手記によって明らかになることもあり得る。以下マクドナルドの同行記によって、使節団の「エドからロンドンまで」の足跡をたどってみたいと思うのだが、まずは幕末使節団がヨーロッパ諸国へ派遣されるようになった経緯についてふれておく必要がある。

## 2 船出のときまで

徳川幕府が遣欧使節団を編成するようになったのには、二つの動機が絡んでいた。

一八五九年七月四日（安政六年六月二日）をもって幕府は、神奈川（横浜）、長崎、函館の三港を開き、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダとの通商を開始した。そして翌一八六〇年（万延元年）、日米条約批准のため、外国奉行新見豊前守正興を正使とする使節団をアメリカに派遣した。当時二十六歳だった福沢諭吉が、佐々倉桐太郎、小野友五郎、肥田浜五郎、中浜万次郎、赤松大三郎ら八十五名とともに、勝麟太郎を艦長とする護衛艦咸臨丸に乗って太平洋を渡ったのも、このときである。

幕府がアメリカへ使節団を派遣したとなると、イギリス、フランスも黙ってはおれない。両国の公使から使節団派遣の要請の声があがった。しかし幕府は、よりさし迫った問題をかかえて、対策に追われていた。江戸と大阪の開市（江戸は一八六二年一月一日より、大阪は一八六三年一月一日より）と、兵庫、新潟の開港（兵庫は一八六三年一月一日より、新潟は一八六〇年一月一日より開港のはずであったが、延期中であった）の実施時期が迫ってきているのに、国内には攘夷の風が吹きまくっていて、開市、開港の実施は、とうてい望めない状況であったのである。イギリス、フランス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル等のヨーロッパ列国を相手に、その延期の交渉を進める必要に迫られていた。

そこで幕府は、駐日イギリス公使ラザフォード・オールコックに働きかけて、使節団派遣と開市・開港の延期交渉の仲介をもらうことになったのである。

オールコックがこの件に関する幕府からの正式の書信に接したのは、一八六一年七月四日、彼が長崎から江戸までの長旅を終えて、東禅寺の公使館に帰着した日のことであった。

書信は二通——一通は將軍からヴィクトリア女王に宛てたもの、もう一通は外国奉行からオールコックに宛てたものであった。両方とも外国との通商拡大に反対する世論を静めるために、江戸、大阪の開市、兵庫、新潟の開港を、向こう七年間延期してほしいという内容のものであった。

オールコックがこの二通の手紙を読んだ翌日、一八六一年七月五日の深夜に、彼が最も恐れていた、イギリス公使官襲撃事件が発生した。そのために彼は、非常に緊迫した状況のなかで、幕府からの申出に対処しなければならなかった。ただ公使館を襲ったのは水戸の浪人たちであって、幕府は事件に関与していないことが判明したことで、オールコックの気分はいく分か安らいだ。加えて一八六一年前半期の貿易

の結果が、きわめて良好であったのも幸いした。政治的摩擦のために、英日間の通商の拡大に支障を生じさせたくないという気持から、オールコックは、將軍からの女王宛ての手紙に推薦状を添えたのである。結果として、一八六八年一月一日までの開港・開市の延期を承認する「ロンドン議定書」が作成されることになるのであるが、そこに至る道のりは長く、またさまざまな紆余曲折があった。

幕府からヨーロッパに派遣されるようになった使節団は総勢三十六名。便宜上主だった顔ぶれとその役職名を列記しておく。

正使 竹内下野守（外国奉行兼御勘定奉行）、副使 松平石見守（外国奉行兼神奈川奉行）、御目付 京極能登守（以上を三使といふ）。  
柴田貞次郎（外国奉行支配組頭）、日高圭三郎（御勘定）、福田作太郎（御勘定格御徒目付）、高鳴祐啓（御医師）、水品樂太郎（御目付持格調役並）、岡崎藤左衛門（同上）、益頭駿次郎（進物取次上番格御普請役）、上田友助（定役元締助）、森鉢太郎（定役）、福地源一郎（定役並通事）、立広作（同上）、大田源三郎（通事）、齋藤大之進（外国方同心）、高松彦三郎（御小人目付）、山田八郎（同上）、川崎道民（御備医師）、松木弘安（のちの寺島宗則、御備翻訳方）、箕作秋坪（同上）、福沢諭吉（同上）等。ほかに副使松平石見守の従者として随行し、のちに『尾蠅欧行漫録』を著わした市川渡（清流）の名も、記憶にとどめておく必要がある。また森山多吉郎（外国奉行調役兼通事方）と淵辺徳蔵（御勘定格調役）の二人は、三十六名が出港したあと、一八六二年二月二十一日に、一時帰国の途につくラザフォード・オールコックと同行して五月二日にロンドンに到着、一行に合流したこともつけ加えておこう。

一八六一年一月二十一日（文久元年十二月二十二日）、使節団一行は、江戸芝田町沖に停泊していたイギリスのフリゲート艦オーデイン号に乗りこんだ。

市川渡の記録によれば、オーデイン号は、長さ一九一フィート（約五八・二メートル）、幅四十二フィート（約一二・八メートル）、重さ二〇〇〇トン、蒸気五六〇馬力、三本マストの火輪船で、三十ポンド砲八挺、十二ポンド砲二十四挺が装備されていた。医者として使節団に加わった高鳴祐啓の『欧西紀行』（一八六七）の巻頭に掲載されている「英船火輪央伝之図」（図一）によって、この軍艦がどのような形をしていたのかを、見てみることにしよう。高鳴祐啓は漢方医であると同時に絵画の才能があつて、『欧西行記』には随所に挿絵が描かれているが、この「央伝之図」だけは「寫凸近藤氏画」となっている。

竹内下野守以下三十五名（太田源三郎の乗船は横浜からだった）の使節団が、艦尾に艦長の海軍提督ジョン・ヘイ卿の旗をなびかせてい

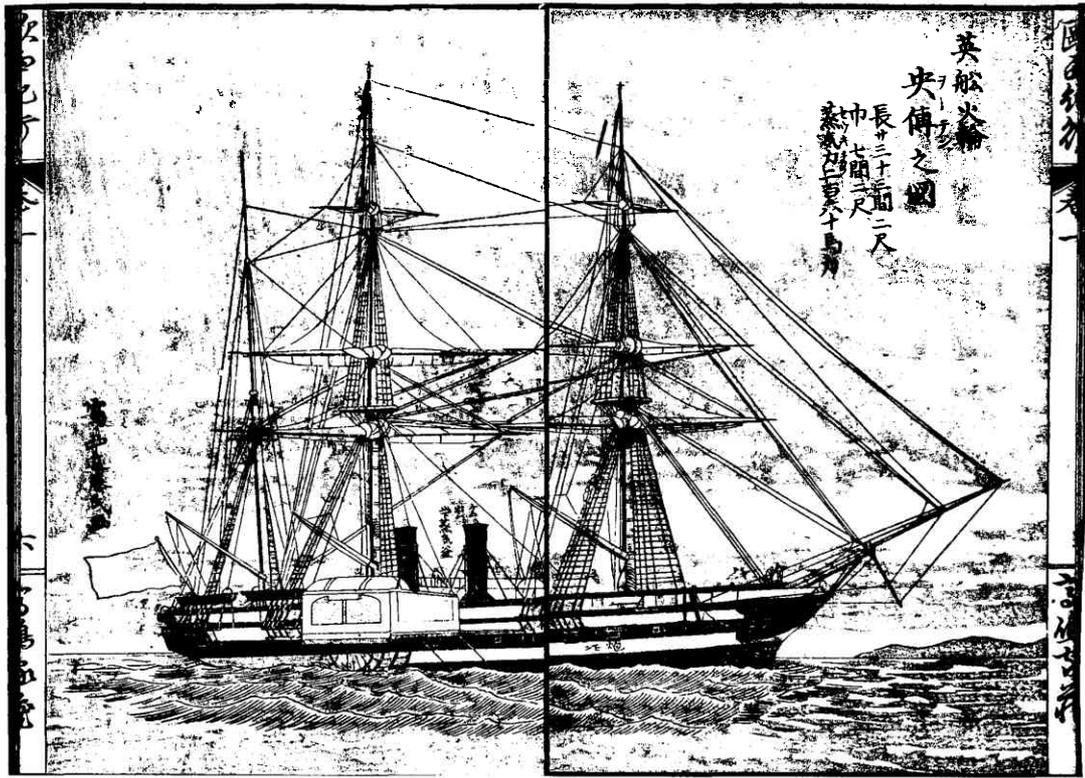


図1 高嶋祐啓「欧西紀行」巻之一より

るオーデション号に乗りこんだのは、一八六二年一月二十一日午後五時十五分。しかしヨーロッパに向けての出発には、まだまだ手間取ることが多かった。

定役ならびに通事として随行した福地源一郎の『懐往事談』第八「幕府三使が歐洲へ向て発遣」に語られているように、船に乗りこんでから出発までの準備が大変であった。使節団は乗船に先立って、「各国帝王宰相への贈品および一行の衣服携帯品にて山を成す許の荷物」を用意していた他に、白米、醤油、香の物、甲州から特別に取り寄せた「万年味噌」などを船に積みこんだ。しかもこれらの品物が出発予定の時間がすぎても届かない。それで大騒ぎとなり、「米、酒、鶏肉」を調達するのに、深夜すぎまで時間がかかったことを、ジョン・マクドナルドは記している。

ようやくして翌二十二日、午前五時半に船が動き出して横浜へ向かったが、そこでまたもたつきがあった。

横浜では、イギリス行き郵便物を積みこむと同時に、通訳として同行する太田源三郎を乗せることになっていたのに、彼の姿はなかったのである。船からボートを降して方々捜しまわったあげくに、やっと彼を見つけるのだが、そのときも太田は他人と話をするのに夢中になっていた。

オールコックが『大君の都』で述べているところによれば、この場

合、太田には多少同情すべき事情があった。というのは、彼が通訳として地球の反対側へ向かっての船旅の通知を受け取ったのは、前の晩のことであった。「彼はまるで水兵の強制徴募隊の手にかかったようにして、使節団との同行の役目を押しつけられたのである。」(第二巻、三八三)

使節団は、いくらおそくても、四月三十日までにはロンドンに到着していなければならない事情があった。五月一日に開かれる第二回ロンドン万国博覧会開会式に三使らが出席するスケジュールが組まれていたのである。それだけに案内の大役を担ったマクドナルドは、出発に際しての、このようなもたつきの連続に少なからず焦燥感を募らせていたに違いないのである。「エドからロンドンまで」の次の一文は、その気持ちを、よくあらわしているといえるだろう。

このような成り行きは、ヨーロッパでは説明さえつかないものであったが、日本人は上下を問わず時間の価値についての観念とはおよそ無縁のありさまであった。彼らのなかの誰かと約束をしたとしよう。約束の時間に半時間、あるいは一時間もおくれることを、何とも思わないのである。時間が彼自身よりも相手の者にとっていかに重要であるかなど、全く意に介さないのだ。彼らにおける時間の観念のなさほど、イギリス人にとってやりきれないものはない。あらゆる階級を通じてそういうありさまである。サー・ラザフォード・オールコック(イギリス公使)と日本の幕府との間の取り決めでは、使節団は一月一日にヨーロッパへ向けて出発することになっていた。それが二十一日、というよりは二十二日の朝までのびてしまったのである。にもかかわらず、彼らは早く早くとせき立てられる運命を慨くのであった。(M六〇四)

マクドナルドの述懐は、当時の日本とイギリスにおける時間の観念の差異を突いたものとして、興味深い。

産業革命を成し遂げて、資本主義体制を固めていたイギリスにあっては、「時は金」(Time is money)の金言が、社会の隅々にまで浸透していた。日常生活すべてが、タイム・スケジュールによって処理され、効率の向上が図られていた。しかも鉄道と電信の発達に伴って、一八四〇年代にはすでに人間万事スピードの世の中になっていたのである。先走って言うならば、一八七二年にロンドンに着いた岩倉使節

団を驚かせた現象の一つは、イギリス人の歩き方の早さであった。「英人ノ足跡ハ地ニ著止セス」といった表現が、『米欧回覧実記』（二）には、何度も出てくるのである。

それに引き換え、当時の日本では、火急のときでも早馬か早駕籠だ。ヨーロッパへの旅ではじめて鉄道を経験した使節団が、「日本にいるあいだは、まだまだ視野が狭かった」ことを痛感したというのも、無理からぬことであつた。

### 3 香港・シンガポールにて

横浜で通訳の太田源三郎と郵便物を乗せたオーデイン号は、それから長崎をへて、二月四日の朝に香港に着いた。「船が港に近づくにつれて、日本人たちは初めてまの当たりにする外国の港の風景を眺めたり、メモをとったりするのに余念がなかつた。

又港内には小舟数千あり。英人之をチャイナ・ボートと唱う。長さ大抵二十尺余、巾は之に称ふ。其製甚だ粗なり。土人此舟に乗り、或は釣魚し、或は網を以て水底に落たるものを拾ひ、或は食物雜貨を売て生産を為す。而して陸上別に住家なく、家族共に此舟に住して家となせり。

これは福沢諭吉がそのときにとつた「メモ」のひとつくでありである。（岩波『福沢諭吉選集』第一卷『西航記』一四）

二月四日の午後に船を降りて陸に上がった一行は、イギリス儀杖兵の出迎えを受け、用意されていた馬車に乗って、宿泊所のコマーシャル・ホテルへと向かつた。そして二月十日までの六日間香港に滞在することになる。マクドナルドの手記には、その間における副使以下数人の「内聞の」夜の繁華街散策を含めて、さまざまな異文化体験の様子が描かれているが、なかでも興味深いのは、香港総督（サー・ハーキュリーズ・ロビンソン）公邸で催されたダンスパーティーに関する部分である。

一行が招かれた二月七日の夜に、総督公邸に入つてまず目を見はつたのは、邸内の照明の明るさであつた。「夜だというのに、まるで昼間のような明るさではないか」と言つて、彼らは驚いた。

「エドからロンドンまで」——ジョン・マクドナルドの遣欧使節団同行記——

まもなく客人たちは、レディ・ロビンソンの案内で公邸内の大舞踏会場に入る。その大広間には、香港在住の西洋の麗人たちが勢ぞろいして彼らを迎える。「居並ぶ婦人たちが奇妙な（サムライ）姿の訪問客に驚きの目を見はるのと同じように、訪問客たちもまた西洋の美人たちの群れにびっくり仰天。」そして、とりわけ彼女たちの色とりどりの衣服に好奇の目を輝かすのであった。

ダンスが始まると、使節団の驚きは頂点に達した。「総督のような高い身分の者までもが、そういうやり方でくるくる旋回したり、足をすべらしたり、とびはねたりするなんて、彼らにとっては論外の愚行で、そこまで自分をさらけ出したあとで、なお威厳を保てるのがいかにも不思議そうであった」と、マクドナルドは書いている。

香港滞在中に彼らが体験したもう一つの注目すべき点は、彼らが始めて観兵式を見学したということである。

広い練兵場で軍楽隊を先頭に、一糸乱れぬ隊列を組んで行進するさまを見た彼らは、思わず「見事！」と、賛嘆の声をあげた。なかでも彼らの注意をひきつけたのは、インド兵連隊の行進であったようだ。「皮膚の色が違うのに、イギリス軍隊と少しも変わらないのは、どうしてか。すべての点で、全く同じく整然とした動きをするではないか」といって、訝るのであった。

イギリスのインド植民地政策が進み、インド帝国誕生への基盤が固められつつあった頃のことである。インド兵たちもイギリス流の訓練を受け、「イギリスの将校の命令で動いているので……」というマクドナルドの説明は、そのままインド帝国の誕生も間近であることを裏づけているのだといえよう。イギリスは一八五八年にインドを直轄領におさめたあと、一八七七年にはヴィクトリア女王を皇帝にしてインド帝国を完成させるのである。

一八六二年二月十日午後五時に香港を出港した使節団の船は、十七日の朝八時にシンガポールに到着。例によって儀仗兵の出迎えを受け、土地の要人たちとの挨拶を交わすセレモニーがあった。

シンガポールで使節団の宿泊に指定されたのは、丘の上に立つ「ヘオテル・ド・レスペランス」で、三使の部屋は、港を見おろす、特に眺のいい部屋であった。高嶋祐啓が『欧西紀行』に「新嘉坡旅館眺望之図」(図2)を描いているのも、よほどその眺めが印象的であったからであろう。

港に浮かぶ多くの船舶は、三使にいろいろな思いを起こさせた。なかでも特に外国奉行兼神奈川奉行であった副使の松平石見守は、好奇

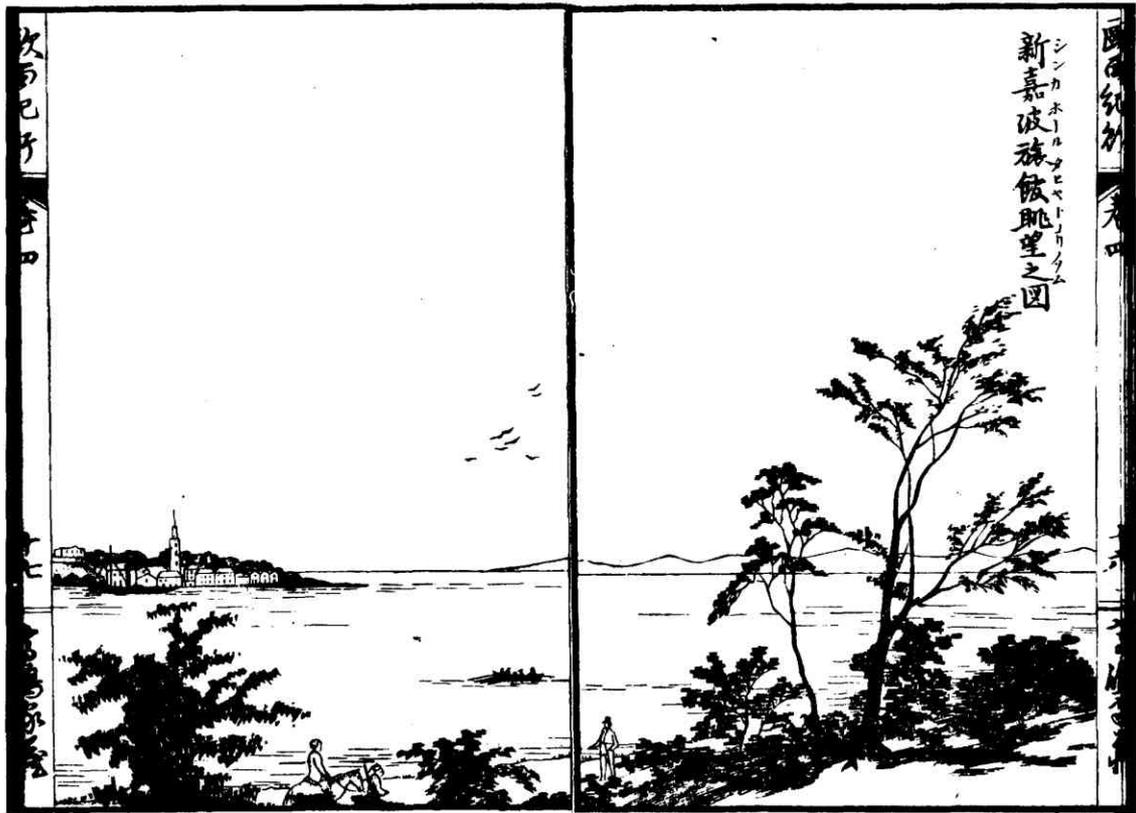


図2 高嶋祐啓「欧西紀行」巻之四より

心が強く、税関や、水先案内料、主要船舶の国籍、一般的な船荷等についての関心と、さまざまな疑問をひき起こすのであった。

そんななかで彼は、「強力な諸大名が外国人および外国貿易の導入に対してまっ向うから反対している」現状に照らせば、日本における開港は時期尚早であったことを指摘、それらの大名と外国人——ひいては日本と諸外国との不幸な衝突を避けるためにも、江戸、大阪、兵庫の開市・開港の延期は必要であることを力説した。とともにこの問題に関して、独自の見解を開陳するのであった。つまり、外国人の生活基盤も外国との通商も、すべて長崎に一局化すべきだというアイデアである。

外国人についての認識が深まるまでは、実際に、長崎以外に安全な地域はない——首都在住の外国人たちが、彼ら（日本使節団）と同じように事態の深刻さを理解するのであれば、彼らは江戸を、そして商人たちは横浜を立ちのいて、長崎に本拠を移すべきである。「そうすればドルを一分銀三枚相当の通貨として流通させ、住宅や金庫の建設にはあらゆる便宜が図られ——壮大な税関が建設されて——すべて西洋の流儀で事業が行われるようになる。（略）そのあかつきには、松平石見守自らが奉行として長崎に赴き、彼の西洋での経験を活かして、通商の拡大と港の利益の増大

化を図るようにつとめたい。」(M六一一)

「驚くべき迷案」、この議論を聴いたときのマクドナルドの内なる慨嘆の声である。「過去三年間にわたる彼らとの交渉も、結局はわれわれとの通商に対して、彼らの目を開くことができなかつたのだ。彼らの税関収入が今や彼らの政府にとって重要な財源となっていることくらいは、考えてみてもよいのではないか！」

二月十八日正午頃にシンガポールを出港、二十五日の朝にセイロン島(スリランカ)北東部の港町のトリンコモリー着、一、二時間休息のちに南西部のガルへと向かう。「そこでの滞在は、きわめて短かく、わずか一日だけだったが、見るに値するものを見るには、それで十分であつた。」とマクドナルドは述べている。

#### 4 汽車の旅、そしてカイロにて

ガルをへてスエズへ向かう途中、船は石炭を補給するためにアデンに寄港。そこで一〇〇トンもの石炭を積み込んだ船は、紅海をのぼつて三月二十日にスエズに到着した。一行はそこでオーデイン号とジョン・ヘイ船長、乗組員らと別れを告げた。そして東洋でトップクラスのヘペニンシユラ・アンド・オリエンタルホテルで昼食をとり、特別仕立てのパーシャ専用の列車に乗つて、カイロへ向かうことになる。日高圭三郎、益頭駿次郎、川崎道民、福沢諭吉ら数人の万延元年のアメリカ体験組を除いては、全員がはじめての汽車の旅である。

最高級の豪華な汽車に乗ったときの浅黒い顔色の使節団一行は、なんと奇妙で、ほとんど場ちがいな見え見えなことか！ そもそも彼らが互いに話していたように、服装がこの種の旅には、全然向いていないのである。まずは長い刀がどうしようもなく邪魔になって、はずしておかねばならなかつた。——それからあんな大きな縁の広い帽子をかぶっていたのでは、うしろにもたれて、ゆっくりくつろぐこともできない。というわけで帽子もとつて、刀と並べて置かれるというありさま。(M六一二)

それから彼らは、わらじを脱ぎ、座席に上がって脚を組んで座り、やおら小さなきせるを取り出して、たばこを吸いはじめる段になって、ようやくゆったりした気分になつた。しかしあとがいけなかつた。カイロに近づいた頃、彼らは丸いテーブルの上に落ちていたたばこの灰をていねいにかき集めて日本紙にくるみ、それを車窓からポイと投げ捨てたのである。同席していた「エジプト鉄道警備員も、これにはびっくり、高貴の外国人客に対していただいていた畏敬の念が、その瞬間から少し変わったように感じられた。」(同上)

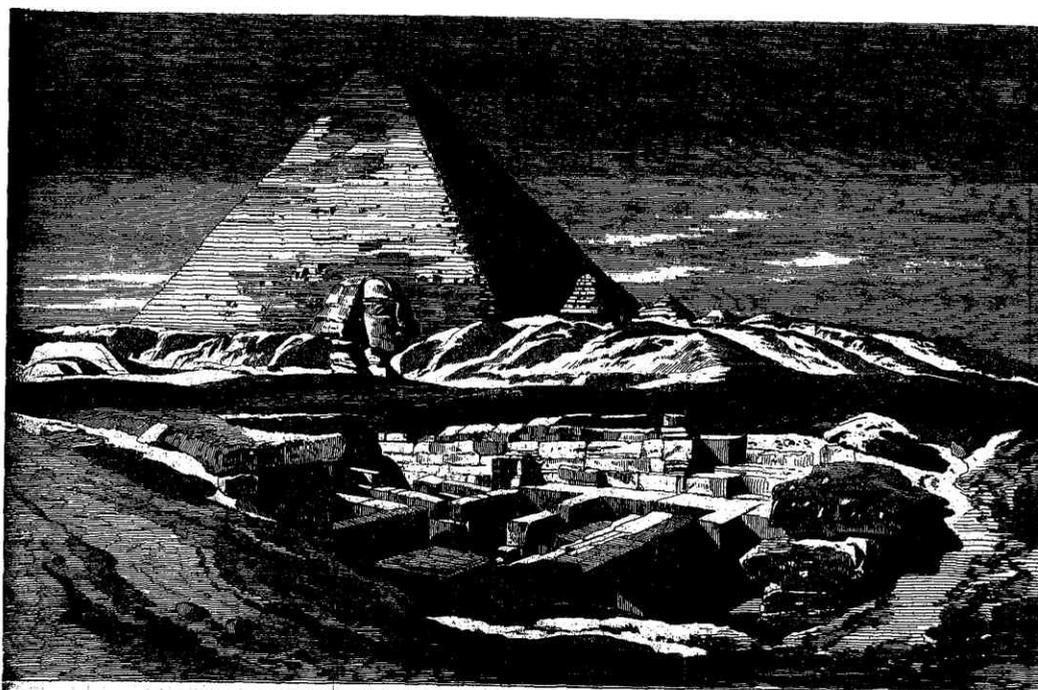
カイロに着いたのは、三月二十日午後四時頃。一行は出迎への馬車に乗って宿泊所に定められていた「ヘミスフィルハーネ」(迎賓館)へ向かつた。エジプト側の案内役の説明によると、この日はたまたまイギリス皇太子(ヴィクトリア女王の第一王子、のちのエドワード七世)が、コーブルク公同伴でカイロ訪問中とあつて、もう一方の高級宿泊施設は、そのためにふさがつてついているといふことであつた。

これは、全くの偶然の出来事であつたにすぎないのだが、エドワード皇太子のエジプト旅行は、当時のイギリス王室の事情と関連して興味深い問題をはらんでいる。そしてまた知られざるすれ違いとしても興味深い。

品行の面で、特にある女性とのスキャンダルで両親——ヴィクトリア女王とアルバート公を悩ませつづけていたエドワード王子は、一八六二年二月に個人教師ロバート・ブルーに付き添われて、エジプト、パレスチナ歴訪の旅に出た。三か月前(一八六一年十二月十四日)にアルバート公が世を去つて、王室に日々喪失感が深まるなかで、女王と王子との間には感情的なわだかまりがつづいていた頃のことであつた。王子の教育の最終段階として、近東を巡り、聖地巡礼をさせることを、かねてから計画していたアルバート公の遺志を実現させるために、ヴィクトリア女王が決断をくだしたのである。

エドワード王子は三月初旬にアレキサンドリアに到着、ナイル川をのぼり、エジプトの遺跡などを見学したあと、カイロ入りをしたのがちょうど三月二十日であつたのである。

『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』一八六二年四月五日付の「皇太子殿下のエジプトの旅」の特集記事によると、エドワードは、その日夕方に「ヒトコブ・ラクダ」の列をつらねて、夕映えの緑地を渡り、ピラミッド群やスフィンクス(図3)を見学したとあるが、三月二十日から二十四日までの四日間にわたつてカイロに滞在した使節団もやはり、ピラミッド見学の旅を行っている。果たしてその首尾



THE SPHINX AT GIZA AND THE RECENT EXCAVATIONS AROUND IT.—FROM A DRAWING BY FRANK DILLON.  
 The Prince of Wales, who has left Alexandria for Jaffa and the Holy Land, enjoyed his stay at Giza, where, during the necessary halt by night on the upward voyage to the great Eastern metropolis of the world, we are informed, highly delighted with his visit to Egypt, and thus affords to travellers in Upper Egypt something of the same information which we have already given.

図3 ピラミッドとスフィンクス、「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」  
 1862年4月5日付、P. 343。

はどうだったのだろうか。

一行がピラミッド見学に出かけたのは、三月二十三日（陰暦二月二十三日）の早朝だ。『尾蠅欧行漫録』には、この日午前六時すぎに三使は馬車に乗って、「奇観塔」（ピラミッド）見学に出かけ、正午前に宿舎に戻られた、とあるが、実はその旅は彼らにとって一大冒険ともいべきものであった。

三使が馬車に乗って行ったのは、ナイル川の渡し船の乗り場まで。それから先が大変だったのである。

船着場に降り立つや否や、一行は船頭たちのくり広げる激烈な客の争奪戦に巻き込まれる。「われわれを護衛してくれたエジプト鉄道の警備員が、その群衆を怒鳴りつけながら警棒をふるっても、なんの効きめもなかった。やつのことでわれわれは、隙間をかくぐって一番近くにあった舟にとび乗った」が、なおも二艘の舟が追いかけて、船頭同士が大声でののしり合いをつづけるのであった。（M六一三）

ナイル川の向う岸へ渡ると、今度はロバに乗っての旅だ。

陸の旅には、ラクダという選択肢もあったのだが、「見るからに何をやらかすかわからないような奇妙な動物」よりも、ロバが選ばれたのである。アーデンで船を降りたときに、いくら鞭打たれても平然としていられる「驚くべき忍耐力」をもった、この動物に関心を向けたことがあったからである。

ロバ——ドンキーは、なるほど一見おとなしいようにも見えるが、「頑固もの」の代名詞にもなっているほどに、厄介な動物でもあるのだ。おまけに乗り手の虚をつくという悪知恵も備わっているようだ。乗り手の挙動の一部始終を察知していて、彼が得意になって手綱をゆるめたところで急に前膝を折り曲げて、相手をつんのめらせることがあるものだ。このときに使節団を乗せたロバたちにも、その習性が出た。彼らには「高貴な身分の乗り手と一般の人との見分けがつかず、いつもの癖で、日本使節の方たちを前にほうり出してしまったのである。」(M六一四)

ということで行は、残りの旅程を徒歩でこなさなければならなくなった。不運にもその日は風が強く、砂あらしがはげしく吹いて、ピラミッド見学には甚だ不向きであった。上まで登るのを断念して内部の見学ということになったのだが、マクドナルドとエジプト側の案内人が先頭に立って、ピラミッドの入口までたどりついて気がついてみると、誰一人としてついてきた者はいなかった。使節団は三人とも喉がかわいて、砂あらしの吹くなかを歩く気がしなかった、ということである。四〇〇〇年の歴史をもつ遺跡を眼の前にながら、折角の実地見学のチャンス逃がしてしまったのである。

仮にモスクや宮殿に多少の興味を感じていたとしても、ピラミッド見学の旅ではさんざんな目にあつた上に、群がるハエやほこりにうんざりしていた使節団は、三月二十四日の午後、特別仕立ての列車に乗ってカイロからアレキサンドリアへ向かった。そしてそこから今度はイギリス軍艦ヒマラヤ号に乗って、マルタ島へと向かうことになる。

## 5 マルタ島からイギリスへ

アレキサンドリアからマルタ島までは三日を要した。海が荒れて船が大きくゆれて、使節団の大多数が船酔いの苦痛を味わった。それでも彼らは、ヒマラヤ号の大きさとスピードに目を見はり、そのような大型艦が迎えに出てくれたことを喜んでるようであった。

マルタ島は十九世紀初頭以来、地中海におけるイギリス海軍の重要な基地となってきた島である。その強大な防備施設が、まず使節団の注意と興味をひきつけた。

彼らはこれらすべての堡塁をイギリスが築いたのかとか、この島はどんな強国から奪い取ったのかとか、配置されている大砲の数だとか、守備隊の兵力などについて、細々とたずねるのであった。そして使節団のなかの何人かの画家は、要塞の立っている港への入口あたりをスケッチするのに余念がなかった。——他の使節たちは、最も印象深い箇所が写しとられているかどうかを、見守っていた。(M六一五)

使節団のなかの画家といえは、まずは高嶋祐啓だ。彼の『欧西紀行』目次には、卷之八に確かに「馬兒太島地勢並婦女図」と「炮台並燈台図」が出ているが、私が閲覧した天理大図書館蔵の版本はこの部分が欠けていて、残念ながら彼のスケッチに接することはできなかった。それに代えてここでは、福沢諭吉の文章によるスケッチを借りて、マクドナルドの足りないところを補うことにしよう。

此地英の所領となりし(一八〇一年)より以来、盛に砲台を築き陸軍を備へ海軍局を設けり。陸軍は英の本国より兵卒を送り、常備の員四千あり。軍艦は此港に備る為の別に定員なしと雖ども、地中海常備の軍艦、常に出入して港内に碇泊せるもの七、八隻より少きことなし。砲台は世界有名の者なり。海に面するもの大小八処、内地に向へるもの四処、皆天然の形勢に拠れり。且海岸皆巖石にして、直に巖上に石壁を築き大砲を備う。大砲は百ポンドアルムストロン、六十八ポンド、五十六ポンド、三十二ポンド、二十四ポンド、十ポンド、八ポンド。各処の砲台を并せ、計大砲二千余挺、歩兵七千五百あり……(『西航記』二二三)

先ほどのマクドナルドの文にあったように、マルタ島の堡塁や守備隊、大砲の数等々について細々と質問をしたのは、ほかならぬ福沢諭吉であったと思わせるような書きぶりではないか。

マルタ島での使節団三使は、二月七日の夜に香港総督公邸で開かれた舞踏会に招待されたときと同じようなカルチャー・ショックを経験することになる。

到着二日目、三月二十九日の夜、三使は島知事夫人、レディ・ギヤスパード・ル・マーチャントによってオペラ見学に招待された。彼らはまず知事夫人から劇場に招待されたこと自体に、少なからぬ当惑を感じたようだった。「日本では彼らクラスの身分の人は、みずから劇

場へ出かけたりしない。芝居が見たいときには、役者を呼んで演じてもらう」のが習慣だったからである。知事と令夫人、高官たちが劇場に出向いて平民たちと席を並べるなんて、彼らから見ればとんでもないことであつたのである。

快適な四日間をすごした使節団は、三月三十一日にマルタ島をあとにした。島を離れるに際して使節団から、海軍提督の旗艦モールバラ号をひと目見たいという希望が出された。モールバラ号は、一行のマルタ島滞在中、沖合に出て大砲の訓練を行っていたが、地中海根拠地司令官であつたサー・ウィリアム・マーティンの好意により、使節団の希望がかなえられることになつた。出発の朝、モールバラ号が近くへ戻り、ヒマラヤ号が進行を停めて、使節団主脳陣が甲板へ乗り移れるように手配がなされたのである。

モールバラ号に移つた一行は、約四十五分間艦内を見てまわり、その船体の巨大さ、搭載されている大砲の数、大ぜいの乗組員などに深い感動をおぼえた。三本の帆桁には人員が配置され、礼砲が響いた。使節団の主脳者たちは全員が起立して何度も頭をさげて、これに応えた。

おそらく今まで味わつたことのないような充実感をもって、彼らはヒマラヤ号に戻り、二日半の船旅を終えて、四月三日に目ざすマルセイユに到着したのである。最初の部分で言つたように、ここでジョン・マクドナルドは、一行と別れてひと足先にロンドンに赴き、ロンドンで彼らを迎え入れる手はずを整えることになる。

使節団はこの日から四月二十九日までフランスに滞在し、翌三十日の朝カレーからフランスの小軍艦「ヘコルス」号に乗って海峡を渡り、午すぎにドーヴァー港に到着、そこで再びマクドナルドの出迎えを受けた。

それに続くマクドナルドの記述によると、ドーヴァーで使節団は市長と自治体からの歓迎のあいさつを受けたあと、ホテルで昼食をとつた。それから特別列車(図4)に乗ってロンドンに向かうのであるが、ここで彼らの着いたロンドンの鉄道駅が、ブリックレイアーズ・アームズ・ステーションであつたことを、明らかにしておく必要がある。

ロンドン橋の南、バーモンジー地区にあつて今はほとんど使われなくなったこの駅は、一八四四年にサウス・イースタン鉄道とクロイドン鉄道のターミナルとして開設された。一年後に両鉄道ともロンドン・ブリッジ駅への乗入れが実現してからは荷物取扱駅となり、主に羊や畜牛の運送に用いられるようになった。しかし、サウス・イースタン鉄道が延長され、テムズ川を北へ渡つたところにチャリング・ク

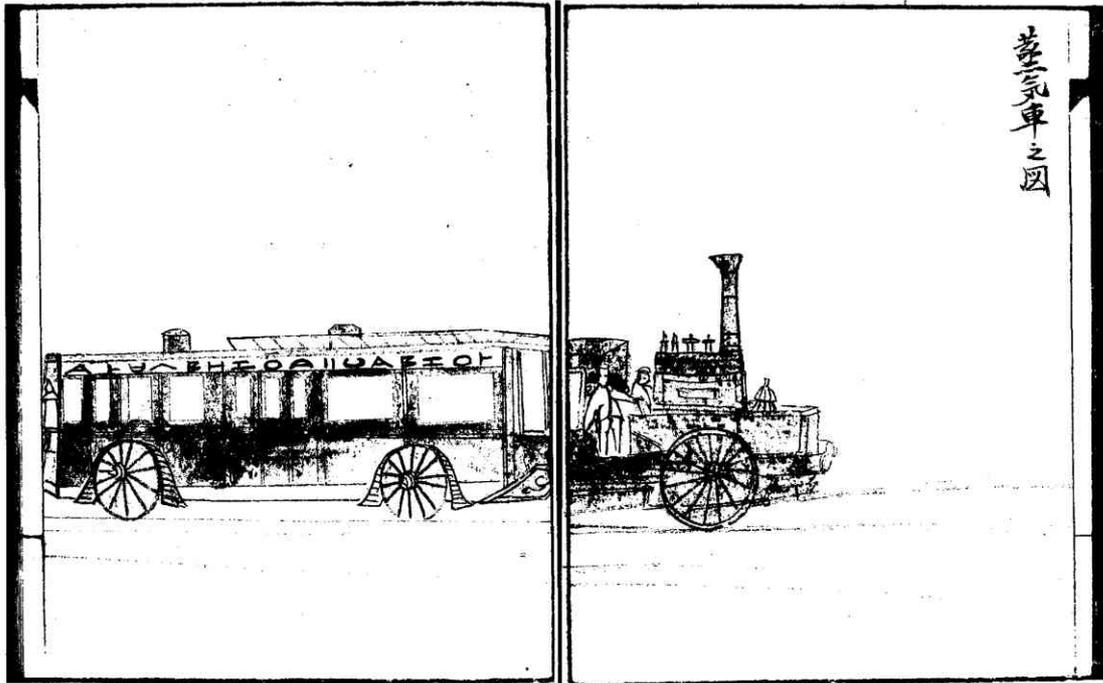


図4 高嶋祐啓『欧西紀行』卷之十一より

ロス駅が開設（一八六四）されるまでの約二十年間、ブリックレイアーズ・アームズ駅は、外国からの要人たちのロンドン入りの玄関口となっていた。福沢諭吉は『西航記』六月十二日の項に、「旅館カラレージ（クラリッジズ）を辞し、鉄路場ブリックレイエルズ・アルムスに至る。即ち（四月三十日）、初て竜動に入る時、ドーウル（ドーヴァー）より蒸気車に乗り着せる（ちやく）鉄路場なり。」と書いている。これをみても使節団が、ロンドン入りをしたときだけでなく、ロンドンからオランダへ向かうときにも、使節団はブリックレイアーズ・アームズ駅を利用したことが確認されるのである。

一行がこの駅に着いたのは四月三十日の午後六時頃、それから馬車でロンドン橋を渡り、シテイを通り抜けてウェスト・エンドに入り、ハイドパーク東のブルック・ストリートにあるロンドン最高級のホテル「ヘクラリッジズ」に入って、旅装を解いたのである。

ここでふり返って、使節団が江戸からロンドンまでの行程で、マルセーユに到着するまでに立寄った諸々の地域や国々を思い出してみよう。香港、シंगाポール、トリンコマリ、ガル（セイロン島）、アデン、カイロ、アレキサンドリア、マルタ島等々。すべての地域、国々が大英帝国の一部をなし、あるいはその支配下におかれようとしていたのである。

使節団がクラリッジズ・ホテルで一夜を明かした翌日、一八六二年五月一日は、ロンドン万国博覧会開幕の日だ。三使以下四名の代表がこれに参加して、まさに最盛期における英帝国の縮図をまのあたりにするのである。